

# 近代から現代までの女子の生徒指導に関する歴史的考察 ～校則に着目して～

Historical Examination of Girls' Student Guidance from Modern Times to the Present,  
with a Focus on School Rules

出張 吉訓          梅澤 秀監  
石出 勉          美谷島 正義  
DEHARI Yoshinori    UMEZAWA Hideaki  
ISHIDE Tsutomu    MIYAJIMA Masayoshi

## Abstract

This study aims to clarify the historical development of student guidance in Japanese school education, with a focus on girls' education. In the past, Japanese educators such as Homori Kingo and Fujimura Toyo have guided students' attitudes and behavior through etiquette and health education. These practices have been institutionalized as school rules and regulations, but their handling has been questioned in recent years, leading the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology to issue a notification for the revision of school rules.

This study investigates the elements of student guidance in school education, including etiquette and school rules, and explores their historical development, especially in girls' education. As a two-year research project funded by the university president, the first year involved collecting information and prior research on Fujimura Toyo's girls' education and Homori Kingo's life and women's etiquette guidance through field research. In the second year, based on the findings of the first year, the study focused on the historical development of Japanese student guidance methods and approaches from the pre-war period to the present, and discussed the implications for future student guidance.

## 要旨

この研究は、日本の学校教育において、児童生徒が学校での生活や教育を受ける上での心構え、及び立ち居振る舞いに関する指導について歴史的変遷を、特に女子教育に焦点を当てて明らかにすることを目的としている。甫守謹吾や藤村トヨといった指導者は、礼法や健康法を通じて心構えを指導してきた。これらの指導は現在の「校則」や「生活のきまり」として規律化されているが、近年ではその扱いが問題視され、文部科学省は「校則」の見直しを通知した。

そこで、この研究では、「礼法」や「校則」を含む学校教育における生徒指導の要素を調査し、特に女子教育に関して歴史的な変遷を探究した。2年間の学長奨励研究として、1年目では関連文献や藤村トヨの「女子教育」に関する情報や先行研究を収集し、甫守謹吾の生涯と女子礼法指導についても現地調査を行った。2年目では1年目の成果をもとに、戦前から現在に至るまでの日本の生徒指導方法とアプローチに焦点を当て、その歴史的変遷を明らかにするとともに今後の生徒指導の在り方を考察した。

**Keywords:** school education, etiquette , school regulations, junior High school, senior high school

**キーワード:** 学校教育、礼法、校則、中学校、高等学校

## I はじめに

日本の学校では、明治から令和を通して児童生徒が学校での生活や教育を受ける上での心構えや立ち居振る舞いについて指導してきている。

この指導の先駆的な指導者として甫守謹吾が挙げられる。甫守は男女の礼儀作法書としての「礼法」を執筆し、人としての心構えについて指導してきた。また、本学の藤村トヨも健康の秘訣として“腰伸ばせ、即、腹の力”を提唱し、体育指導の指針として、また人間の精神的な心構えとして本学に脈々と根付いている。

これらの心構えや立ち居振る舞いについては、現在の学校教育の中で「校則」や「生活のきまり」「生徒心得」など（以下、「校則等」と言う。）として、児童生徒が遵守すべき規律として定められている。しかし、近年ではこの「校則等」の扱いが問題視され、文部科学省では令和3年度に「校則」の見直しについての通知を都道府県教育委員会等に発出した。

そこで、本研究では「礼法」や「校則」など、日本の学校教育における生徒指導のきまり、特に女子教育における指導に着目して調査することで生徒指導の歴史的変遷を明らかにし、今後の学校教育における生徒指導の方向性についても考察した。

## II 研究の方法

本研究は2年間の学長奨励研究として、1年目については、文部省及び文部科学省等の「生徒指導」「礼法」「校則」等に関わる文献及び藤村トヨの「女子教育」についての文献や先行研究などを収集するとともに、甫守の生涯と女子礼法指導について現地調査などを実施した。また、2年目については、1年目の文献や現地調査で分かったことをもとに、日本の生徒指導の歴史や女子教育に着目して第二次世界大戦前から現在までの生徒指導の方法や在り方について調査することで、生徒指導の歴史的変遷を明らかにした。また、「校則等」の現状についてアンケート調査を実施した。

## III 研究の結果と考察

### 1 日本の生徒指導の歴史の中での「礼法指導」の位置付けについての考察

学校は児童生徒にとっては小さな社会と言える。そこでは、教育目標達成のために教師と児童生徒、児童生徒相互の信頼を基盤とした中で教育活動が展開される。もちろん社会に開かれた教育課程を展開することで家庭、地域社会との人間関係も存在する。この人間関係を望ましい形で構築していくためには、一定のルールが必要である。このルールは、児童生徒の心得や学校生活のきまり、校則などといった形でそれぞれの学校に

存在し、児童生徒の指導の一つの基準ともなっている。授業時間や始業時刻、教育課程の内容などは安易に児童生徒の意向で変えることはできないが、時代や社会の変化に伴い社会通念上改善を必要とされるものもある。

例えば、登校時刻は8時30分までとし「遅刻をしないようにする」、朝は先生や級友に「さわやかなあいさつをしよう」、授業の用意はしっかりと「忘れ物をしないようにする」「服装は清潔を保とう」などの「 」書きの内容は、学校生活の児童生徒の心得として、今でも多くの学校で生徒指導の基準になっている。このような日本の生徒指導の基準は、どのような形で生まれ変わってきたのかについて先ずは調査してみることにした。

武道の世界では「礼に始まり、礼に終わる」という言葉がある。中村(2011)は「礼儀とマナーとは、個人の心の問題が社会的なかわりをもち、異なる価値観をもった人との間で折り合いをつけなければならなかった時、人間関係をスムーズにするためのルールや文化のことである。」と言っている。武家社会では、社会が形成され、その中で人々が行動するとき、共通認識をもっていた方がよいことがある。その一つが礼法といえる。剣道や相撲のはじめのあいさつとしての蹲踞の姿勢、柔道のはじめの一礼などがその一例と言える。

この礼法の歴史について興味深い記述として、綿拔(2012)は「社会が形成され、その中で人々が行動するとき、共通認識をもっていた方がよいことがある。その一つが礼法といえよう。こうしたことは、身分社会においては、上層階級のやり方に下層階級があわせていく。したがって武士が為政者であった時代は、将軍家のやり方にあわせるのが原則である。」と分析している。武士が中心であった時代の社会形成の共通認識は、時の将軍家のやり方でよかった。しかし明治になると、柴崎(2022)によれば、小笠原流は教育、特に家庭教育の重要性と、そのことを支える女子教育に力を注ぎ、大きくシフトを転換していったことが分かる。

本研究の目的は、生徒指導の歴史的変遷につい

て礼法指導の一つの足がかりとして、今後の生徒指導の方向性を探ることである。明治の学制發布から現在まで使われている生徒指導は、時代に合わせてその在り方も変わってきている。本研究においては、学制發布からの女子教育について研究したが、ここでは我が国が民主的な国家となった第二次世界大戦前後の教育に焦点を当て女子教育を中心に考察することを試みた。

## 2 女子教育における生徒指導と礼法指導の関連についての考察

### (1) 昭和時代(戦前)の女子教育

東京大学男女共同参画室(2023)によれば、政府は明治4(1871)年に文部省を設置し、明治5(1872)年には学制を公布した。この学制は日本初の近代的な学校制度で、全国に学区を設け、小学校から大学までの教育を規定し、新しい女学校も設けた。

女子教育の視点から言えば学制發布頃までに各種の女学校が開校された。小学校と同年齢の女兒を入学させる女児小学校も多く開校された。また、小学校の上に位置する中等学校程度の女学校も開校された。その教育内容は、江戸時代以来の伝統的な女子教養を主とするものや、新時代の洋学を中心とするものなど様々であった。このように明治時代の女子教育は男子教育と同様に行なうことが奨励され大正、昭和に続いていく。

国立国会図書館(2004)によれば、昭和3年(1928)には女学生数が36万人近くなり大衆化が進み、制服はセーラー服が昭和の初めには大半となった。

大津(2021)によれば、高等女学校では制服を「校則等」に定めている学校もあったとしている。制服を定める場合は、服装の形状を述べるだけの場合と絵で示している場合があった。また、戦前の「服装検査」は厳しく管理が行われ、毎週行われていたという記録もある。また、高等女学校の「校則等」では、「淑徳を涵養し」とあり、「出校の際は成るべく袴を着け衣服髪飾り等は極めて質素にし衛生に適ふを本位として決して華美に属する

服装を加ふべからず」という規定があった。

「装飾を避ける」、当時も高価であったと考えられる「絹を避ける」、襟は「白」などの規定があった。また、高等女学校では「化粧や髪にこてをあてること（パーマ）の禁止、髪飾りなどの装飾品についてや下着や靴など服装に関する注意」が定められていた。また少数ではあるが「靴は黒皮の短靴とす」「脚絆は白麻製の編上とす」などが定められていた。「質素」を強調することが多い時代であるが、色を指定する必要がさほどなかったと分析している。また、髪型については、宮城県立高等女学校では「髪の結び様は常束髪銀杏かへし等」と特定の髪型を指定していたが、多くの学校は「清潔に」「整える」という規定であったと分析している。

文部省(1972)によれば、昭和6(1931)年の満州事変以後、わが国の教育は戦争の影響を受けるようになる。文教行政の上にも戦時下教育という考え方が強く示されるようになった。昭和16(1941)年12月からの太平洋戦争は、急速に戦時の教育体制をとることを要請される。さらに昭和18(1943)年からは決戦体制をとることが必須であることから、教育全般が非常時に備えるものとなり、戦争の激しさが本土の近くに迫るとともに、戦時教育令が公布され、学校の教育はほとんど停止されるまでになった。

中等教育を担当する諸学校は、長い間、中学校・高等女学校・実業学校に三分されていたが、中等学校として取り扱うこととなった。教育の目標は皇国民の育成にあるという考え方と内容で再編成され、戦時下教育の方向へ進められることになる。

## (2) 戦前までの女子教育と礼法指導について

この頃の時代の礼法指導の先駆的な指導者として甫守謹吾が挙げられる。甫守についての記録はあまりないが、文久3(1863)年に誕生、昭和19(1944)年没までの81歳の生涯であった。また、福岡県糸島郡桜井村出身で、明治15(1882)年福岡師範学校小学師範科を卒業、明治16(1883)年に

東京高等師範学校師範学科取調科を卒業する。その後、開発教授法等を学び、福岡の母校の助教諭、福岡県御用係、生徒監・付属小学校監督を経て彦根高等女学校校長、明治31(1898)年には名古屋高等女学校校長(現 名古屋市立菊里高等学校)を歴任している。

その後、体調を崩したが、明治38(1905)年に日本橋女学校(現 開智日本橋学園中学・高等学校)の教頭となり、明治39(1906)年には関根正直と共著で「女子師範教科国文新読本」も発刊している。その後の明治41(1908)年東京市視学となり、大妻技芸学校、常盤女学校、大妻高等女学校の顧問兼講師、大正11(1922)年には東京女子商業学校校長、東京女子実修学校校長を歴任。昭和3(1928)年8月には国民作法研究所長として、「家事及裁縫」第2巻7号「各女学校に課する作法は如何なる教師が受け持っているか」を寄稿している。

調査では、甫守は、国文や図書館教育にも力を注いでいるが、特に女子教育の視点から礼法指導に力を注ぎ、昭和16(1941)年「現代女子礼法」を発刊した。この著は、本研究を進める上で有用と考える。そこで、この著から当時の女子教育を窺い、現在の生徒指導と比較することで礼法指導について深めることとした。この著は、26章からなる当時の女性の立ち居振る舞い等の礼儀作法の書物である。最終章が結婚で結んでいるところが当時を彷彿させる。26章の内容は、次のとおりである。

1.緒言、2.生徒の心得、3.日常の心得、4.姿勢及び容儀、5.座作進退、6.敬礼、7.言語、8.授受・進撤、9.贈答、10.服装、11.食事、12.皇室に対し奉る心得、13.国家に関する心得、14.建具の開閉、15.訪問、16.応接・談話、17.通信(書簡・郵便・電信・電話)、18.名刺、19.紹介、20.慶弔、21.招待及び応召、22.家例及び祭事、23.物品の取扱、24.社会生活に関する心得、25.国際的礼儀作法、26.結婚

また、明治以降の礼儀作法の書物の中に明治14(1881)年5月に出版した「小学女礼式」があるがその内容は、「起居進退」(起きたり座ったり、進んだり退いたりする動作に関する礼法)、「物品薦撤」(物品を客に進めたり、退いたりする際の礼

法)、「陪侍周旋」(主人のそばで御用する際の礼法)、「授受捧呈」(物品を授受したり、捧げたりするときの礼法)、「進饌程儀」(食事を出したり、進めたりなどするときの礼法)、「飲食程儀」(食事をする際の礼法)、「附録」などが記述されている。これらの内容は、甫守の「現代女子礼法」まで脈々と受け継がれている。そして、第2章から第10章までの内容は、現在の学校教育においても学校のきまりとして存在してきている。

これらの、内容を読むと「…ねばならぬ」「…するのがよい」「…心がける」等の表現が目立ち、女子学生、生徒が日常生活を送る上で必要な礼儀作法について、詳しく解説している。この意味で、現在の「校則等」の原型と言える考える。

この書物の初版の当時の国内の状況は、国家総動員法も成立し、日本が長い戦争の時代へ入ろうとしている時と言える。国家としても秩序を保ち、国民が一丸となっていくことを最優先として考えていた。そのためには、一つの組織として上下、いわゆる縦の秩序を強固に保つ必要があり、社会、家庭、学校における教育を通してこの浸透を図ったものと考え。前述の通り、この書物は甫守がこれまで累積した指導や考え方を参考に作られ、先だって発表された「礼法要項」に準じている。この書物が、発刊された当時の日本における時代背景は次のとおりである。

日本軍が昭和16(1941)年12月8日ハワイ真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まり、約3年8ヶ月後の昭和20(1945)年の終戦まで日本国民にとっては大変な時代を送った。多くの日本国民が政府のプロパガンダによりその行動が政府の意図した方向に仕向けられた時代と言える。

このような時代背景を踏まえると、国家として政府が日本国民の思想や行動を一定の方向に仕向け、戦意高揚と集団としてのまとまりを高めようとした時代と言える。もちろん家庭教育を筆頭に、学校教育においても強く行われていたと考える。

当時の文部省は、この背景を踏まえ、昭和16(1941)年4月に礼法要項を発布する。この礼法要項に準拠し、解説書(指導書)を作成後、この「現

代女子礼法」をわずか4ヶ月後に発刊することになる。

今日、高等学校までの学習内容の大綱的基準である学習指導要領が時代の変化等を踏まえ、およそ10年の期間を経て改訂しているが、当時のこの内容は、限られた期間で急ピッチで作成され、発刊されている。当時の印刷技術に鑑みると、おそらく既にある程度の内容は事前に決められていたものと推測できる。国家としての団結や戦意高揚が優先されていたものと考え。

甫守(1941a)の冒頭の例言には、この書物の特徴を下記のように示している。

- 1 本書は女子師範学校・高等女学校・実科高等女学校・高等家政女学校・女子技芸学校・裁縫女学校及びこれらと同程度の各種女学校における礼法教授上の教科書に充てることを目的として編集したものである。
- 2 本書は上記の目的を達成するため、昭和16年4月文部省より発布された礼法要項に準拠し、我が国の婦人生活の実際に必要と認めたものにつき、著者が多年経験した教授上実験の結果を整理して編纂したものである。殊に現下我が国は、大東亜新秩序建設の指導者となり、世界新秩序建設の中心としての大使命を負っている位置にある。その重任を果たすためには、国民各自の間にも、又国際間にも、正しく強き精神を持ち、礼儀作法に適した言語・動作をなすことが益々必要となってきた。
- 3 本書に記載する教材の配列は、教授上の順序によったものではない。したがって教授者各位は、当該学校所定の教授細目により、教材も土地の状況によって、適当に取捨選択することが非常に大切である。
- 4 礼法の要旨は、その機に臨み、その実際に当たるによって、自ら体得するものであるから、単にこれを知識としてだけ習得せず、努めて見慣れ、聞き慣れ、行い慣れることが必要である。
- 5 礼法の教授指導は、一人の礼法の教授者が行うのではなく、全校の職員がこれに当たるべきであり、その時間も修身・礼法の時間は言うまで

もなく、その他如何なる時間においても機会あるごとに懇切に教授指導すべきのみならず、家庭のしつけと相まって、その実行に留意し、互いに協力一致してその成績をあげるよう努めることが非常に大切である。

6 礼法教授の要旨は、その理論の説明と実地動作の練習と相まってその功を奏するものであるから、その練習上の標準となり、模範となるべき動作を示すべき場合には、一々図解をもって、これを説明し、いささかも不便にならないように期している。

この著で甫守は、礼法を礼儀作法と捉え、緒言に次のように要旨を書いている。

「礼儀作法は道德の美を形に表すことである。即ち我が恭敬・和親の真心を高尚・優美に言動・動作に表し、そこで人に快感を与えるように行動することである。しかしながら、言動・動作が高尚・優美であってもそこに真心がなかったならば、単なる虚礼に過ぎない。又、精神を高尚・優美に保っていても、これを表す方法を知らなかったならば、我が真心を先方に会得させることが出来なばかりでなく、かえって、先方の感情を害するようなことになる。したがって、真の礼儀作法は、精神の美と表現の美と両者が揃い合わさることによって始めて、その意義が達成できるのである。」

正に心と形の一体化が重要であるという指摘と言える。このように礼法指導は、学校生活におけるきまりと明治以降から密接に関係していた。

### (3) 昭和時代(戦後)の女子教育

大津(2021)によれば、終戦後、旧制の中学校と高等女学校は、新たに男女共学の高校としてスタートする。教育基本法が制定され「民主的で文化的な国家の形成者を育成し、世界の平和と人類の福祉に貢献する」人材の育成が希求される。共学化に伴い、男女の制服等の規則を新たに規定する学校があった。これらの「生徒心得」は学校や教員が作成したものがほとんどであった。戦前と戦後の大きな違いは「民主的」「自主的・自律的」「創造的」などの言葉で始まっている点である。また、

西欧のエチケットやマナーの考え方も入り込み、礼儀作法の在り方も変化してきた。

昭和24(1949)年に文部省は、「新しい中学校の手引き」を作成し、「学校における善い行いの奨励」「学校の安全、防災訓練」、生徒の参加による「校則の改善」などが示された。この手引を受けて、京都市立旭中学校では、厳格すぎて守られていない「雨の日の土足の規則」が「はきもの規則」に変更され、「校舎内では、ゴム底、わら底のはきものは、ドロや土をていねいに落として、はいてもよい。その他のはきものは、校舎内で使うことができない。」とされた。また、大阪府立北野高校の生徒心得の冒頭では、「名誉と伝統ある北野高校生として、また将来民主社会の指導者教養人たるべく本校生徒は下記の諸項を守らなければならない。」と記述され、特に女子生徒に関する内容では服装や所持品について「女子は質実清楚を旨として贅沢華美に流れないこと」「女子は背広型で黒又は紺を原則とすること」「女子はバッヂをつけること」「頭髮は男女ともに高校生としての品位を失わないようにすること」などが定められたと分析している。

昭和40(1965)年には文部省は「生徒指導の手引き」を刊行し、高校の役割には学習指導だけでなく生徒指導も示したが、そこには校則や生徒心得に関する記述は存在していない。

1960年代後半から「高校紛争」の時期に入り、生徒心得をめぐって紛争となった。中には、高校生から教職員に対して生徒心得の撤廃などの要求がなされた。多くの高校では「制服の自由化」「着帽」「長髪」が問題となった。その結果、制服が自由になった学校もあった。また、「外出・登校する際は、学校で認められた服装を着用すること」などの不要と思われる規定も廃止されたと分析している。

昭和50(1975)年頃には「校則等」が生徒指導、生徒管理の手段として使われた。非行防止の観点から「頭髮制限」「バイク禁止」などの規則が定められた。また、この頃是对教師暴力が急増していた時期でもある。このため、校内生活の心得、所

持品規則、服装や髪型の規則、通学路の規則など、細かく規定された。女子では「スカートのひだは24本」「白を基本としたひもつきの運動靴」「黒または茶の通学靴」「白ソックス」「おさげ、おかっぱまたはこれに準ずる髪型」「髪が肩にふれない」「パーマ、髪かざりの禁止」「長い髪は結ぶ」など細かく規定された。昭和55(1980)年頃になると、過剰な校則に対して問題視され、裁判になるケースもあった。公立中学校での「丸刈り校則」等で争われた。さらに昭和63(1988)年には、公立中学校で髪型違反した生徒の写真を卒業アルバムに掲載しないという事件が発生した。こうした状況から、文部省は「校則の見直し」の通知を発出している。また、文部省は全国中学校校長会と全国高等学校校長会に委託して、「日常の生徒指導の在り方に関する調査研究」を実施した。

その結果、「校則の見直し」が行われた内容では「服装」が中学校で60.7%、高等学校で62.2%と最も多かった。高等学校では、「頭髮」「校外生活」「校内生活」「所持品」などの見直しが行われた。文部省の「校則の見直し」の通知以降に「見直したことがある」と回答した中高は56.6%、「見直ししている最中」が17.3%で、見直しは約7割を占めた。また、「校則の見直し」は「継続的に取り組むことが大切」「思い切った見直しが必要」「生徒が主体的に考える指導をすることが大切」「学校は家庭や地域との信頼関をつくるとともに開かれた学校づくりを目指すことが大切」など、生徒や保護者からの理解の必要性が挙げられていると分析している。

### 3 現代社会における「校則等」の実態と女子教育

文部科学省(2010)の「生徒指導提要」では「校則」を取り上げ、「校則の根拠法令」「校則の内容と運用」について述べている。校則の制定等に関して、法律による規定はなく、判例によると、校則の制定権は校長にあるとされている。判例の共通した説明は、「学校は、国・公・私立を問わず、生徒の教育を目的とする教育施設であって、その設置目的を達成するために必要な事項については、法

令に格別の規定がない場合でも校則等によりこれを規定し実施することのできる自律的、包括的な権能を有す」としている。つまり、法律によるきまりはないが、各学校が必要に応じて制定し、実施することが可能ということである。したがって、「校則の見直し」については、最終的には校長の権限であるとしている。また、「校則の見直し」の方法としては、「児童会・生徒会、学級会などの場を通じて主体的に考えさせる機会を設ける」「PTAにアンケートする」などして、児童生徒の主体性を培う機会とすることが記述されている。

そのような中、平成27(2015)年大阪府立高等学校の女子生徒が生まれつき茶色い髪を黒く染めるよう指導されたことから不登校になる事例が起こる。元女子生徒は府に慰謝料などを求めた訴訟を起こした。最高裁判所は元女子生徒の上告を退け、頭髮指導の違法性を認めなかった。ただし、不登校であったことから、学校が教室に椅子と机を置かなかった点が違法として、33万円の賠償が命じられた。

この判決を契機に校則が問題視され、いわゆる「ブラック校則」として再び校則について議論されるようになる。

明治時代に作られた「校則等」は、形を変えながら現代社会に引き継がれている。甫守(1941a)の礼法もまさに「校則等」に匹敵する内容と考える。その後、「男女同権」「ジェンダーフリー」などと言われるようになってはいるものの、現代社会においても「校則等」は重要な意味をもっている。社会や時代の変化、人々の価値観の多様化によって、前述のように度々「校則の見直し」を行っている。最近では、令和3(2021)年6月8日付で文部科学省初等中等教育局児童生徒課から「校則の見直し等に関する取組事例について」の事務連絡が発出された。このことに伴い、各教育委員会や各学校は校則や生徒指導の在り方を見直しに取り組んでいる。本研究でも、このことについて調査を行い実態把握に努め、今後の生徒指導の在り方を探る根拠としたい。

#### 4 校則見直しの視点とガイドライン、アンケート調査結果とその分析

##### (1) 校則見直しの視点とガイドライン

校則は、学校生活を円滑に送るために必要なルールといえる。校則の内容は①施設の管理運営上、児童生徒の施設利用に一定の制約を加えざるを得ないために設けられるルール、②他人の利益を侵害する行為を禁止するルール、③服装・頭髪などの、生徒の生活に関するルール等の必要最小限のものであると考える。

令和4(2022)年に改訂された「生徒指導提要」では、校則を改定する際には、①生徒や保護者の意向も聞くこと、②ホームページに公開することなどが提言されている。

校則の制定については、法律で決まっていない。しかし、判例では、校則の制定権は校長にあると認めており、校長が教職員や児童生徒保護者の意向に配慮しながら、必要な校則を決めることがよいと考える。

文部科学省は、校則の見直しに関して、以下の二点について強調している。

- ① 学校を取り巻く社会環境や児童生徒の状況は変化するため、校則の内容は、児童生徒の実情、保護者の考え方、地域の状況、社会の常識、時代の進展などを踏まえたものになっているか、絶えず積極的に見直さなければならない。
- ② 校則の内容の見直しは、最終的には教育に責任を負う校長の権限であるが、見直しの際には、児童生徒や保護者が校則について確認や議論する機会を設けたり、PTAにアンケートをしたりするなど、何らかの形で参加できるようにすることが求められている。

##### (2) アンケート調査結果とその分析

このアンケートは、文部科学省が令和3(2021)年6月に「校則」の見直しについての通知を都道府県教育委員会等に発出したことを受け、各学校が校則や生徒指導の在り方についてどのように取り組んだかを明らかにすることを目的とし、本学の所在地である東京都教育委員会及び区市教育委員

会の協力の下、以下の要領で実施した。

- ① 対象：東京都立高等学校93校(内44校が回答、回収率47.3%)  
都内中学校 101校(8区市)(内55校が回答、回収率54.5%)
- ② 方法：インターネットを使用し、Formsで回答
- ③ 実施時期：令和5年5月1日から6月30日まで
- ④ 内容：資料1のとおり

##### 1) 校則の見直し

文科省の通知を受けて令和3年度から4年度にかけて校則等の見直しを行ったのは回答校数から見て高等学校は33校(75.0%)、中学校は50校(90.9%)であった。

校則の見直しを行った学校について、5点の質問に記述式で回答してもらったところ、次の傾向がみられた。

##### ① 生まれ持った性質に対して配慮のないもの

高等学校では、頭髪の染色について、地毛であれば規制はしないが、意図的な染色については指導の対象とするとの回答が多くみられた。「頭髪に関する申請書」が存在し、入学時に申請させている。これをもって「配慮している」との回答が多くあった。また、中学校では、禁止や制限をする校則はないとする回答が多い。一方、「地毛に関しては指導の対象としない」としつつ染色への指導を継続している回答も多くあった。

##### ② 様々な文化や性の多様性に対して配慮のないもの

高等学校では、文化や性の多様性に対する配慮としては、女子の制服の選択肢にスラックスを用意する学校が多くあった。男女別の設定を撤廃した学校もある。男子のスカートの着用に対する懸念の声もあった。また、中学校では、高等学校と同様に制服(標準服)での男女の別を撤廃する動きが多い。頭髪についても男女の区別をなくしている。

##### ③ 健康上の配慮のないもの

高等学校では、コートやセーターの規制緩和を挙げている例が多い。しかしその内容は許可される「コートの色、形」を増やす対応で、むしろ校則

## 資料1 アンケートの内容

- (1) 校則の見直しを行った。 はい・いいえ  
「はい」と回答した方は下記の項目に回答下さい。
- ① 生まれ持った性質に対して配慮のないもの（例：地毛の色）  
② 様々な文化や性の多様性に対して配慮のないもの  
（例：制服に男女の区別を設け、選択の余地のないもの、髪型を規定しているもの）  
③ 健康上の配慮のないもの（例：冬場のコート着用の禁止、体調管理に問題が生じるもの）  
④ 合理的な説明が難しいもの（例：靴下の色、肌着の色、過剰に限定しているもの）  
⑤ その他、特に女子生徒に関することで見直した点（例：化粧、リップクリームの色）
- (2) 生徒指導のあり方を見直した。 はい・いいえ  
その中で、女子生徒の生活指導で見直した点がありますか？ はい・いいえ
- (3) 昭和初期には、多くの学校で次のような内容が生徒心得に明記されていました。現在、貴校で該当する内容の校則・生徒心得の項目はありますか？複数回答可ですのであるものに☑を付けてください。（「現代女子礼法」甫守謹吾著「第2章生徒の心得」を基に作成しています。）
- ① 校規・校風に従い校長はじめ先生の指導を守ること。  
② 熱心に授業に取り組み、よき成績を挙げること。  
③ 礼儀作法に習熟し、善良なる生徒となるように心掛けること。  
④ 学校の始業時間に遅れないよう登校すること。  
⑤ 父母等に挨拶「行って参ります。」を述べて登校すること。  
⑥ 学校から帰った時も、「只今帰りました。」と挨拶すること。  
⑦ 登校途中、先生又は近隣の人・親戚・知人、学友同志等に出逢った時は挨拶すること。  
⑧ 校内及び通学途上は、規定の制服・徽章等を着けること。  
⑨ 校内及び通学途上は、容儀(礼儀にかなった身のこなし)を正すように心がける。  
⑩ 授業を受ける時、その始めと終わりには、先生に対して挨拶すること。  
⑪ 授業が終わっても、先生より先に教室を出る不作法をしないこと。  
⑫ 校長室及び職員室等に用ある場合は、ノックして許可を得ること。  
⑬ 校長室及び職員室等に用ある場合は、静かに扉を開いて挨拶すること。  
⑭ 用ある先生の席に行って挨拶後、用事を告げること。  
⑮ 先生からの話はよく聞くこと。  
⑯ 先生への用事が済んだら挨拶すること。  
⑰ 校長室及び職員室等の出口では先生方に挨拶し退出すること。  
⑱ 授業中は姿勢を正して心を落ち着けて望むこと。  
⑲ 先生の指導をよく理解するように専心注意すること。  
⑳ 休憩時間中に勝手に校舎外に出ないこと。  
㉑ 学校内では諸事静かに行動すること。  
㉒ 学校内では大声で談笑しないこと。  
㉓ 廊下・階段を駆けたりしないこと。  
㉔ 廊下の通行・階段の昇降等は常に左側を歩くこと。  
㉕ 校舎内で先生その他来賓等に逢った場合は、左側に寄り静かに挨拶すること。  
㉖ 朝礼や儀式の際、欠席や遅刻等をしないこと。  
㉗ 講話、訓話等をしっかり傾聴すること。  
㉘ 食事の時は、手を清め容儀(礼儀にかなった身のこなし)を整えること。  
㉙ 食事の最初に「いただきます。」と挨拶すること。  
㉚ 食事中は静かに行儀正しくすること。  
㉛ 食事の終わりに「ごちそうさま。」と挨拶すること。
- (4) (1)校則の見直しと(2)生徒指導のあり方を見直しについて、どのように取り組みましたか？  
複数回答可ですのであるものに☑を付けてください。
- ① 検討委員会等の校内組織を設置した  
② アンケート調査を生徒に実施して、考える機会を設けた。  
③ 生徒会等を活用して、生徒に話合わせる機会を設けた。  
④ 学校評価項目等を活用して、保護者や地域の意見が見直しに反映できるようにした。  
⑤ 学校運営連絡協議会等で見直した内容を協議した。  
⑥ 見直した内容を速やかに学校通信やホームルーム等で生徒に説明した。  
⑦ 見直した内容を速やかに学校通信や保護者会等で保護者に説明した。  
⑧ 新入生説明会で中学生とその保護者に説明した。  
⑨ 学校ホームページ等に掲載し、保護者をはじめ地域への周知を図った。  
⑩ その他、取り組んだことがありますか？
- (5) 次年度、今年度とは違う新たな取組を予定していますか。
- (6) 取組を通しての感想や感じられた課題等をご記入ください。

が増えている印象がある。また、中学校では、規制を緩和する回答が多い。パーカーの着用、セーター、カーディガン、トレーナーの着用などを認める例もある。衣替え期間を無くし、生徒自らが天候や体調を判断して適宜着用するようにしている。ただし、「華美でないもの」等の規定を行っている。

#### ④ 合理的な説明が難しいもの

高等学校では、コート、マフラー、セーター、カーディガン等の「指定色」を増やす対応している。また、染髪については改める指導をしつつ、生徒に考えさせる指導を取り入れている。また、中学校では、靴下の色や肌着の色などについては、指定の色を増やすなど選択の幅を広げる対応を行っている。

#### ⑤ その他、特に女子生徒に関することで見直したこと

高等学校では、女子生徒の化粧やスカート丈に関する項目を挙げ、継続して指導するとした回答が多い。その他、ピアスやカラーコンタクト、アクセサリ等も禁止を継続している。(図1) また、中学校では、化粧、リップクリーム等の禁止を継続している。(図2)

なお、図1及び図2は校則について見直しを行った中で「その他、特に女子生徒に関することで見直したこと」に関する記述回答を、UserLocal AIテキストマイニングサイト (<https://textmining.userlocal.jp/>) を利用してテキストマイニングし、その結果を出現頻度順にワードクラウドで表示したものである。

#### 2) 生徒指導の在り方の見直し

生徒指導の在り方を見直したのは、回答校数から見て高等学校14校(31.8%)、中学校は24校(43.6%)となった。見直しを行った学校について、自由記述で意見を募った。

高等学校では、生徒が自主的に話し合う組織を編成し、ルールの見直しを行っているという回答がある。また、「特別指導」については自宅謹慎指導から登校謹慎指導に変更しているという回答があった。



図1. 特に女子生徒に関することで見直したこと  
(高等学校)

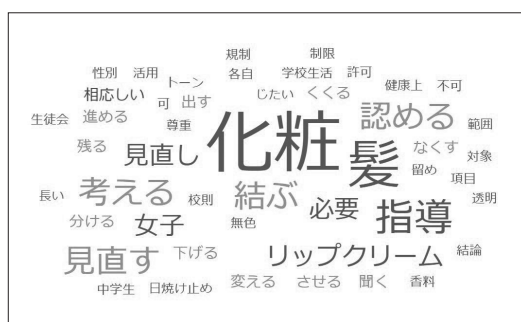


図2. 特に女子生徒に関することで見直したこと  
(中学校)

中学校では、謹慎というスタイルがそもそも存在していない。「生徒に寄り添う」ことを基本とした指導が主流である。また、生徒の個別指導では発達障害の有無に配慮した組織的対応をしている。生徒の呼称に男女とも「～さん」に統一したという回答があった。

#### 3) 校則に含まれる内容について

甫守謹吾著「現代女子礼法」の「第2章生徒の心得」を基に、昭和初期から続く校則の内容が、現代の校則にどう影響しているかを調査するため、資料1の(3)の項目が存在するかどうかを聞いた。(図3)

高等学校と中学校に特徴的な差があることが分かった。

中学校の校則に最も多いのは「④学校の始業時間に遅れないよう登校すること。(74.55%)」で

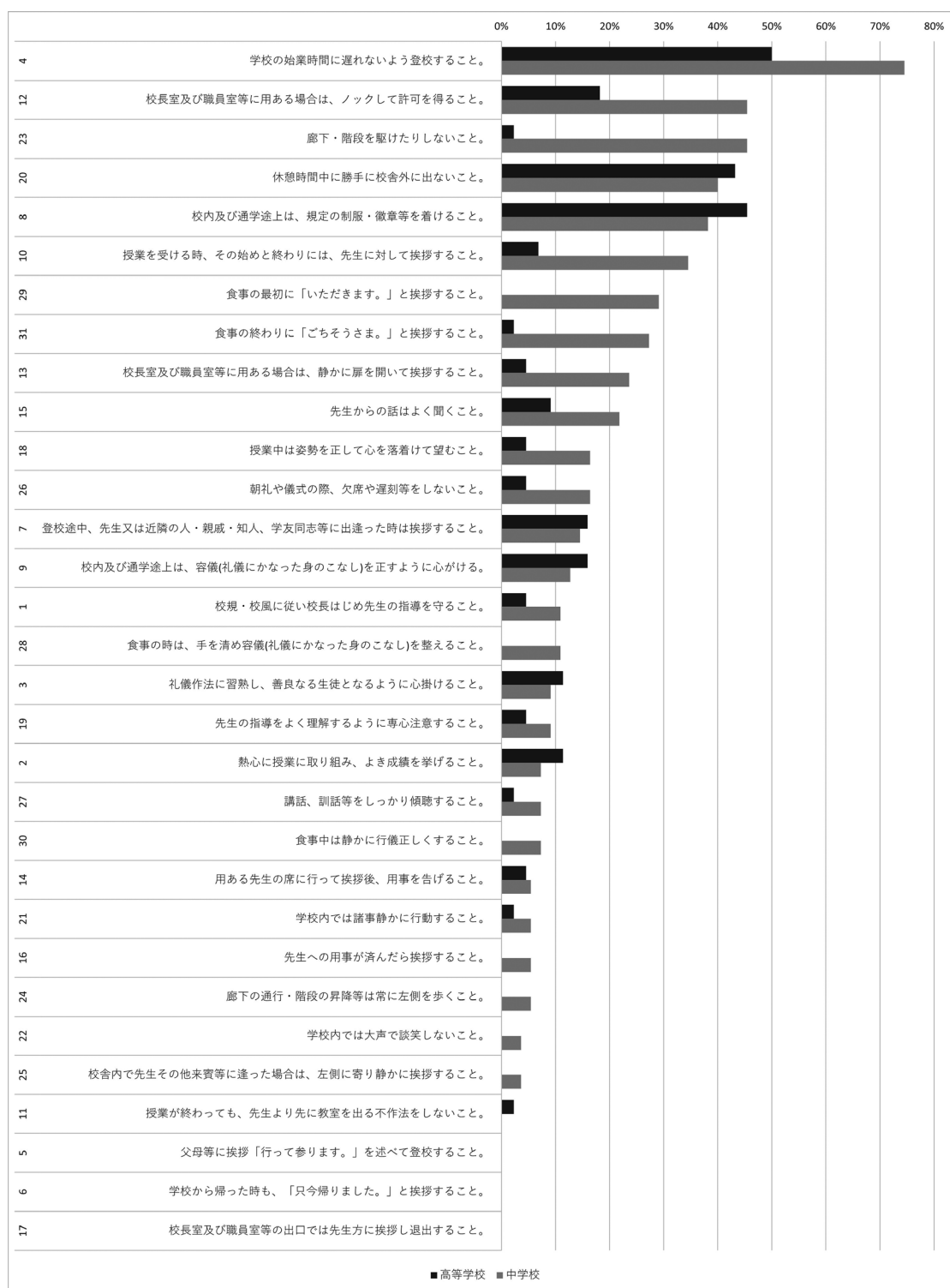


図3. 校則等に記載がある事項

あった。次に「⑫校長室及び職員室等に用いる場合は、ロックして許可を得ること。(45.45%)」「⑬廊下・階段を駆けたりしないこと。(45.45%)」「⑭休憩時間中に勝手に校舎外に出ないこと。(40.00%)」となっている。これらは学校生活での基本的なルールを身に付けさせる内容であり、中学校の特性が表れていると言える。

また、中学校では、高等学校では少数であるが、比較的多いものには、「⑲食事の最初に「いただきます。」と挨拶すること。(29.09%)」「⑳食事の終わりに「ごちそうさま。」と挨拶すること。(27.27%)」があり、生活に根差した項目まで校則に盛り込んでいる例がみられた。

高等学校の校則では、中学校と比較して割合の高いものは以下の3点となった。「⑧校内及び通学途上は、規定の制服・徽章等を着けること。(高45.45%)」「⑨校内及び通学途上は、容儀(礼儀にかなった身のこなし)を正すように心がける。(高15.91%)」「③礼儀作法に習熟し、善良なる生徒となるように心掛けること。(高11.36%)」で、礼儀作法に根差したものが多くあった。

なお、このアンケート調査は女子体育研究所研究倫理委員会の研究倫理審査の承認(承認番号:「研倫審・2023-01号」)を受けて実施したものである。

#### IV 研究のまとめと今後の生徒指導の在り方

「校則等」は、学校生活の児童生徒の心得として、今でも多くの学校で生徒指導の基準になっている。戦前の高等女学校では、「質素」が強調されて細かく規定された。また、本研究で着目した甫守の「現代女子礼法」の中にも、当時の女性の立ち居振る舞い等の礼儀作法が示されている。国家が国民の思想や行動を一定の方向に仕向けたと考える。終戦後は教育基本法が制定され、「民主的」「自主的・自律的」「創造的」などの言葉が使用され、西欧のエチケットやマナーも取り入れられ、礼儀作法の在り方も変化した。その後、1960年代後半からの「高校紛争」の時期には不要と思われ

る規定が廃止されたが、1975年後半からは「校則等」が生徒指導や生徒管理の手段として厳しく規定されていた。近年では、一般社会からみれば明らかにおかしい校則、いわゆる「ブラック校則」が問題視され、「校則等」は校長が決定するが、その際には教職員や児童生徒、保護者の意向に配慮し、見直しも適宜していくことが大切となった。

教育には常に「不易と流行」がある。歴史的な変遷からも、政治的、社会的、文化的な環境及び道徳観などの影響を強く受けていると考える。我々が調査した結果においても、「生まれ持った性質」や「様々な文化や性の多様性」「健康上」「合理的な説明が難しいもの」などについて中学校と高等学校で見直しが図られてきている。今後の社会はさらにグローバル化が進展していく。多様な人々との交流をはじめ多様な価値観と接し、理解し合い、合意形成を図っていくことが必要となる。このことは学校教育においても同様であると言える。これからの生徒指導は、学校を取り巻く環境や児童生徒の状況に合わせ、児童生徒や保護者の考え方、地域の状況、社会の常識、時代の進展などを踏まえ絶えず積極的に見直していくことが大切である。また、児童生徒が、急速に変化する社会を生き抜いていく上で、自ら物事を積極的に考え、社会の一員としての強い意志をもって様々なことに取り組んでいく態度を身に付けていけるよう指導していくことも重要と言える。

一方で東京都の公立中学校と高等学校の調査結果では、女子の生徒指導として高等学校では化粧やスカート丈、ピアスやカラーコンタクト、アクセサリー等の禁止、また中学校では化粧、リップクリーム等の禁止を継続していると回答している。今後、生徒の中には、このような細かな校則等に違和感をもつ生徒も増えていくと考える。このため、各学校の教育目標を達成するため、教職員と児童生徒、児童生徒相互の信頼を基盤の下、生徒指導を展開していく必要がある。その際に大切となることは、児童生徒が自己の目標を設定し、集団や社会の中で自他理解と自己実現を図っていける力を身に付けることである。このため、

学校はキャリア教育の推進を図り、人としての在り方生き方の指導を充実していくことがますます重要となると考える。

なお、本研究では、東京都の公立中学校と高等学校を調査したが、今後は小学校も含め全国の国公私立学校についても調査分析し、研究を深化していく必要があると考える。

これらのことを実現するには、児童生徒に対しての個別指導と集団指導を適宜実施するなど、生徒指導の機能を高めていく必要がある。具体的には、個別指導では面接などを通して個の内面の変容を図る教育相談的なアプローチが大切となる。また、集団指導では集団としての合意形成を図り、集団の変容と個の変容も図るアプローチが大切となる。このことは特別活動の領域が大きく関連しており、各学校では特別活動の充実を図っていく必要があると言える。

おわりに、「校則等」の中には、安易に児童生徒の意向で変えることができないものもある。一方で、時代や社会の変化に伴い社会通念上改善を必要とされるものもある。このことは、本学の「学則」や「部則」などについても同様と言える。「校則等」の改善を図ることは、女子教育にとどまらず、今後の生徒指導の在り方に大きな影響を及ぼすことになる。こうしたことから、学校は不断的努力で積極的に改善を図っていくことが重要である。

## V 引用・参考文献

- 呑海沙織(2013) 近代礼法書における図書館マナーと甫守謹吾, 情報学10巻2号 pp1-11
- 藤村トヨ(1991)(平成6年) 「私の歩んで来た道」東京女子体育大学藤栄会事務局
- 藤坂由美子、及川佑介、掛水通子(2022) 「婦人と体育」「健康の女性」(1924-1930年)における研究の特徴, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第57号 pp137-147
- 福井守(1976) 明治初期女子教育の諸問題(1)～“学制”から“第一次教育令改正”まで～, 東京女子体育大学紀要 巻11, p. 48-62

- 甫守謹吾(1916)(大正5) 国民作法要義、金港堂書籍株式会社
- 甫守謹吾(1929)(昭和4) 中等学校用現代作法要項、東京大光館
- 甫守謹吾(1931a)(昭和6) 新作法要義、金港堂書籍株式会社
- 甫守謹吾(1931b)(昭和6) 現代女子作法上巻、金港堂書籍株式会社
- 甫守謹吾(1931c)(昭和6) 現代女子作法中巻、金港堂書籍株式会社
- 甫守謹吾(1941a)(昭和16) 新制現代女子禮法、金港堂書籍株式会社
- 甫守謹吾(1941b)(昭和16) 現代の新作法、啓文社
- 国立国会図書館東京本館(2004)(平成19年) 「女學生らいふ」第148回常設展示
- 姜華(2011) 高等女学校における良妻賢母教育の実際に関する一考察—校長などの訓話、校訓・生徒心得、寮生活などの分析を中心に—, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊19号-1
- 姜華(2015) 大正期の高等女学校の学校生活に見る良妻賢母教育の実際—校長訓話・生徒心得を中心に—, 早稲田教育評論 第29巻第1号 pp85-96
- 文部省(1949)(昭和24年) 「新しい中学校の手引き」
- 文部省(1965)(昭和40年) 「生徒指導の手引き」
- 文部省(1972)(昭和47年) 「学制百年史」, (昭和47年8月作成)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm)
- 第一編序章 「三 明治維新直後の教育改革」
- 第一編第一章第二節初等教育「二 教育令・改正教育令と小学校の制度」
- 第一編第四章第一節概説「一 戦時期における教育の動向」
- 文部科学省(2010)(平成22年) 「生徒指導提要」, (平成22年3月作成)
- 文部科学省(2021)(令和3年) 「校則の見直し等

に関する取組事例について」, (令和3年6月8日作成)

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1414737\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1414737_00004.htm)

文部科学省(2022)(令和4年) 「生徒指導提要」, (令和4年12月作成)

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1404008\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008_00001.htm)

中村民雄(2011) 中学校武道必修化について—武道の礼法, 武道学研究43-(2): 1-11

日本橋高等女学校同窓会事務局(1925)(大正14年) 日本橋高等女学館同窓会誌「会報29」

日本橋高等女学校同窓会事務局(1926)(大正15年) 日本橋高等女学館同窓会誌「会報30」

(学)日本橋女学館(1996)(昭和45年) 「日本橋女学館60年史」

大野一英(1986)(昭和61) 「ファースト・ガールズ・スクール旧制名古屋市立第一高等女学校外伝」, 中日出版社

大津尚志(2021) 「校則を考える—歴史・現状・国際比較—」, 晃洋書房

柴崎直人(2022) 小笠原流礼法による女礼教師教育とその教育方法について —明治10年代の礼儀の教育における小笠原流礼法の関わり—, 岐阜大学教職大学院紀要

東京女子体育大学藤栄会(1932)(昭和7年) 祝創立七十周年記念藤村トヨ先生思い出の記

東京大学男女共同参画室(2006) 日本の女子教育の歴史, [https://www.u-tokyo.ac.jp/kyodo-sankaku/ja/activities/model-program/library/UTW\\_History/Page05.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/kyodo-sankaku/ja/activities/model-program/library/UTW_History/Page05.html)